

研究主題

「児童が興味・関心をもって主体的に活動する音楽づくりの指導と評価の工夫 －学習意欲を、題材全体を通して持続・向上させるための手だて－」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
墨田区立二葉小学校 主任教諭 櫻井 文子

第1 研究のねらい

小学校学習指導要領（平成20年8月告示）には、音楽活動を活発に、かつ効果的に進めるために、音楽科の目標の重要な内容の一つとして「音楽を愛好する心情」を育てることが掲げられている。さらに、小学校学習指導要領解説音楽編（平成20年8月）には、音楽を愛好する心情を育むためには「児童が楽しく音楽にかかわり、学習する喜びを得るようにすること」が大切であり、そのためには「音楽に対する興味・関心をもつ」ことが必要と示されている。本研究では、表現領域における音楽づくりに焦点を絞り、児童が興味・関心をもって主体的に活動する小学校音楽科の指導と評価の工夫について研究を進める。

小学校学習指導要領解説音楽編（平成20年8月）では、「音楽づくりは、児童が自らの感性や創造性を働かせながら自分にとって価値のある音や音楽をつくる活動である。」としている。身に付けていたる技能にかかわらず同じスタートラインで始めることが可能なため、児童の音楽との関わり方や音楽への価値観を広げられる分野である。優れた実践においては、音楽が苦手な児童も生き生きと楽しむ姿が報告されている（平成26年度小学校及び中学校各教科等担当指導主事連絡協議会音楽部会）。一方、「音楽の授業で、音楽をつくることが好き」と回答した児童は約5割、音楽づくりに「児童が興味・関心をもちやすい」と回答した教師は約4割という調査結果もある（平成27年小学校学習指導要領実施状況調査）。このことから、音楽づくりは音楽との関わり方や価値観を広げられる分野であり、児童の興味・関心を高めることができる学習であるにもかかわらず、その指導が成果につながっていないのではないかと考えられる。

音楽づくりの学習においては、発想や思いに加え、音を音楽へと構成するための手段が必要である。発想や思いのみでは、児童は音楽をつくる方法が分からずに戸惑い、音楽科として育むべき資質・能力を身に付けることが難しい。しかし、「音楽のつくり方の指導」に偏ってしまうと、音楽づくりは「決められた音楽を手順どおりにつくるための作業」になってしまう。

そこで、本研究では、発想や思いをもち、試行しながら音楽をつくっていく過程に注目し、児童がその活動を意欲的に楽しむための具体的な手だてを明らかにすることをねらいとする。

第2 研究仮説

音楽づくりの授業において、自分の発想や思いをもち、音や音楽で実現していく学習活動や、その過程で成果を実感したり認められたりすることができる評価を取り入れた学習過程によって、児童は、試行を繰り返しながら音楽をつくることを楽しみ、題材全体を通して学習意欲を持続・向上させることができるであろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 音楽科における児童の学習意欲について

東京都教育研究員報告書小学校音楽（平成22年度から平成26年度まで）、自ら学ぶこどもを

育てる—学習意欲の向上を図る学習指導の展開(初等教育資料)(平成 22 年)等の先行研究や文献を基に、音楽科における児童の学習意欲について分析した。その結果、音楽科における児童の学習意欲は題材の学習過程全体を通して変化するものと捉え、学習意欲は、①導入で計画的に喚起され、②音楽の仕組みや要素を聴き取り(知覚)、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること(感受)とともに広がり、③自分の思いや意図を音楽で実現することや、④その成果を実感したり適切に認められたりすること、によって持続・向上すると考えた。

(2) 音楽づくりの活動を通して育成すべき資質・能力について

小学校音楽科学習指導要領の変遷(昭和 22 年(試案)から平成 20 年まで)や、小学校学習指導要領解説音楽編(平成 20 年 8 月)、中央教育審議会教育課程部会教育課程企画特別部会 論点整理(平成 27 年)、学習指導要領実施状況調査(平成 27 年)、幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(平成 28 年)等から、音楽づくりの活動を通して育成すべき資質・能力を「感性を働かせ、思いや意図をもって音楽表現を生み出したり、音楽のよさや価値を考えたりする力」と捉えた。

2 調査研究

音楽づくりの指導の傾向をつかむために、東京都教職員研修センターをはじめとする各地の研修センター等が公開している学習指導案や、東京都教育研究員及び東京教師道場で実践した学習指導案、各地域で開催された教育研究大会で公開している学習指導案を収集し、分析した。

(1) 指導事項アとイの扱い方について

音楽づくりの指導事項は、ア(発想をもち即興的に表現する力)とイ(音楽の仕組みを生かして音を音楽へ構成する力)の二つである。二つの力は独立して示されているが、関連し合っている。収集した学習指導案 72 点を、指導事項の扱い方で分類した結果、現行学習指導要領に基づく音楽づくりでは、指導事項イを多く扱う(71%)傾向があることが分かった。音楽づくりにおいて、発想よりも音楽の仕組みを生かして表現することが優先されている実態が読み取れる。また、指導事項アを扱う学習指導案は 17% にとどまり、発想力を指導事項としながら評価や活動内容では仕組みを生かす力を求めている場合や、アとイを関連させて扱う学習指導案(12%)でも指導事項アの評価を設定していない場合等があることから、指導事項アの指導や評価に、指導者が難しさを感じていることが考えられる。

(2) 音楽づくりの条件設定について

音楽づくりには、つくるためのルールやテーマ等の条件設定が必要である。収集した学習指導案 72 点から音楽づくりの条件設定を分類・分析した結果、音楽をつくる手段を示す条件と児童の発想や思いを引き出すための条件、大きく分けて二つのタイプの条件設定があり、音楽をつくる手段を条件として設定した学習指導案が 58%、つくる手段に加え発想や思いを引き出す条件を設定した学習指導案が 39%、発想や思いを引き出す条件を設定した学習指導案が 3% であった。この結果からも、音楽づくりが「つくり方の指導」に偏る傾向があることが分かる。

3 開発研究

基礎研究・調査研究、特に音楽科における児童の学習意欲についての考え方を基に、児童が音楽づくりを意欲的に楽しむためには、自分の発想や思いを音や音楽で実現していく体験や、学習の成果を実感したり認められたりする体験を重ねることが有効であると考えた。そこで、

発想や思いをもち、音や音楽で実現していく段階を児童の思考の流れに沿って整理した学習過程と、児童の思考や学習状況を共有する評価の工夫を取り入れた授業モデルを開発、検証した。

開発した授業モデルの有効性を検証するために、児童の変容を見取るとともに、検証授業の前後に児童への音楽づくりに関するアンケートを実施して結果を比較した。また、児童による振り返りカードの記入を毎回の授業後に行い、記述内容や数値の変化を分析した。

4 検証授業

都内公立小学校の第4学年児童(100名3学級)を対象に、開発した授業モデルによる題材「リズムで会話しよう」を実施し、手だての効果を検証した。

(1) 手だて

児童の思考の流れに沿って整理した学習過程 を実現するための手だて		児童の思考や学習状況を共有する評価の工夫	
ねらい	手だて	ねらい	手だて
・児童が自分の発想や思いをもち、それを音や音楽で表現する過程を、段階的に実現できるようにする。	指導計画 ・学習指導案の指導上の留意点に「予想する児童の思考」を加え、児童の思考に沿った段階的指導を計画する。	・教師が各児童の思考や学習状況を適切に捉え、指導に生かす。	評価計画 ・児童の思考に沿った形で、「おおむね満足できる」状況(Aを含むB)の具体的な児童の姿とともに「努力を要する」状況(C)と判断されそうな児童への手だてを想定した評価計画を作成する。
・発想を音にする楽しさを味わうことで、思いを音楽に構成する力を豊かにする。	指導事項 ・指導事項アとイで身に付く力を関連させて考える。 例) 音遊びから題材をスタートさせ、その発展としてリズムアンサンブルづくりに進む。	・児童の学習成果や思考を全体で共有する。	場面設定 ・児童の学習成果や思考を全体で共有できる場面を意図的に設定する。 例) 音遊びの中での工夫や振り返りカードでの気付き等を、題材のねらいに即して紹介する。
・発想や思いを音や音楽で実現するために必要な知識・技能を確実に習得させる。	【共通事項】 ・題材のねらいに即して必要な【共通事項】を示す。 ・指導事項アとイで身に付く力を関連させて考える。 例) 音遊びの中で、楽しみながら必要な力を身に付けさせる。	・児童が学習成果を実感する。 ・教師が児童一人一人の思考の流れを把握し、各児童の成果を認め、学習をきめ細かく方向付ける。 ・児童と教師が互いの思いや願いを共有する。	学習成果の言語化・数値化 ・その時間にできたことや分かったこと、思いや願いを書く学習カード等を用意して毎時間の終わりに配布、児童が記入し、教師が回収して確認、コメント等を記入する。
・児童が具体的な音としてイメージし、発想や工夫がしやすいようにする。	条件設定 ・児童が何を考えてどう試すのかを想定してテーマやルールなどの条件設定を計画し、授業での児童の反応を観察しながらそれらを吟味、精選していく。		

(2) 児童の変容

ア 振り返りカードの分析結果より

毎時間後の5段階自己評価による次の授業に向けての意欲(振り返りカードではワクワクレベルと表記)の数値に上昇が見られ(図1)、平均値の差を分散分析で検定した結果、統計学的に有意な差($p<0.05$)が認められた。

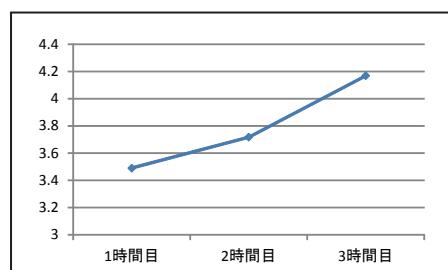


図1 ワクワクレベルの変容

イ 検証授業の前後に実施したアンケートの分析結果より

6項目すべてにおいて検証授業実施後のアンケートの数値に上昇が見られ(図2)、平均値の差を分散分析で検定した結果、「音楽をつくることが好きだ」「音楽をつくることは楽しい」「もっと音楽づくりをしたい」「自分のアイデアや工夫を音楽の仕組みを生かして生かして音楽をつくることができたができた」という項目が上昇傾向にある。

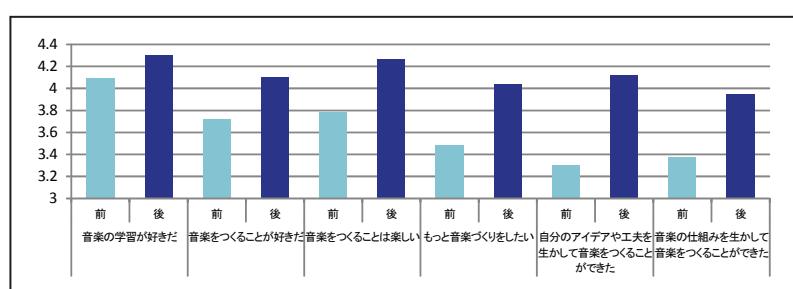


図2 検証授業実施前後のアンケートの変容

を生かして音楽をつくることができた」「音楽の仕組みを生かして音楽をつくることができた」の5項目に統計学的に有意な差($p<0.05$)が認められた。

ウ 学習意欲に関わると思われる学習の様子とその分析より

学習意欲に関わると思われる学習の様子を抽出、その内容や変化について考察、分析を試みた(表1)。その結果、誰もがでけて楽しめる音遊び等、その時の段階に適した条件設定の枠から児童が徐々に発想や積極性を広げていく様子や、必要な経験や技能を得て見通しをもつことで思考や活動を活発化し、つくりたい音楽への自分の思いや自分なりの価値観を構築していく様子が観察できた。

表1 学習意欲に関わると思われる学習の様子とその分析

	第1時	第2時	第3時
学習の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・四拍子の拍の流れにのって、手拍子をしたり教師のリズムや音色を真似たり変化させたりする音遊びに、集中して取り組む様子が見られた。 ・「リズムにのって手拍子していた」「音色に工夫をしていた」等、互いのよさを見付け、認め合っていた。 ・「ああその考えもあったか、と思った。(児童コメント)」 ・「やり方によっていろいろな音が出て一つ一つがう音なので楽しいなと思いました。(児童コメント)」 ・「色々手遊びをやったら、たくさんひらめいたよ！(児童コメント)」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「悲しみ」「驚き」「喜び」等の感情を手拍子のリズムや音色で表そうと様々な音で試していた。 ・感情を言語化してから音で表現しようとする児童と、感情をそのまま音で表現しようとする児童がいた。 ・「いろいろな中から自分でえらんで、それ以外にも考えられました。(児童コメント)」 ・「友達のリズムをよく聞くと、自分でもアイデアがたくさん出てきました。(児童コメント)」 ・「かなしみ、なぐさめ、よろこびをやろうとしていたけど、できなかつた。でも作るのは、さいこうに、たのしかった。(児童コメント)」 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の活動が活発化し、多くの笑顔とアイデアの連鎖がみられた。 ・自分たちがつくった音楽を発表したい気持ちが強くなった。 ・「となりのペアの人のアイデアもきてよかったです。自分のリズムと他の人のリズムを合わせると、すごいリズムができました。(児童コメント)」 ・まとめとして用意した大人の演奏によるリズムアンサンブルを、興味をもって熱心に聴いていた。 ・「大人の人のえんそうは長くてすごいはく力があって手のいどうが早くいろいろな所で音を出しているからすごかったです。(児童コメント)」
分析	<ul style="list-style-type: none"> ◇制限されたルールや音の流れの中で、即興的に表現したり工夫したりする緊張感を楽しむことができた。 ◇誰もができる、「できた」感覚が自己ともにつかみやすい音楽遊びにすることで、安心して積極的に楽しむ姿が見られた。 ◇認められる喜びが、独自の発想や知識・技能の習得、学習意欲につながった。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇テーマとして「会話」を設定したことで、発想を具体的な音でイメージし、問い合わせの仕組みを使ってリズムをつなぎ、アンサンブルに発展させることができた。 ◇「拍の流れにのる」という技能的なルールが、よい意味で難度を上げ、反復練習につながっていた。 ◇音遊びを通して、発想の面白さや工夫の豊かさをよさとする感覚が定着していった。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇ルールが定着し、つくりたい音楽が見えてくると活動が活発化する。「三人でやってみたい。」「同じリズムを一緒に打つ部分をつくりたい。」等、願いや思いも具体化したものになる。グループ構成の影響も大きい。 ◇「こんな作品をつくりたい」思いと、つくる過程の見通し、必要な経験・技能を得ることで、児童の学習意欲は持続・向上し、音楽づくりの活動は活発化する。

第4 研究の成果

- ・発想や思いを実現していく段階を児童の思考の流れに沿って整理した学習過程によって、学習を方向付け、児童に学習の見通しをもたせることができた。
- ・児童の思考や学習状況を共有する評価の工夫を取り入れた授業によって、児童に学習の成果を実感させ、認められる喜びを味わわせることができた。
- ・指導者もまた、児童の思考の流れを想定して学習を計画することで、題材を通して身に付けさせたい力や学習ステップを精選するなど、児童の学習状況を把握しながら授業を進めることができた。

第5 今後の課題

- ・検証授業3時間目(最終時)の児童は、発想や思いが広がって「つくりたい」気持ちが高まった状態にあり、思考や表現を絞り、共有する過程を味わうにはまだ時間が必要であった。この過程を児童が十分に味わえるようにするための工夫と改善をした授業モデルを開発する。
- ・学習意欲と楽しさの関係や、音楽づくりの授業における楽しさの構造に興味と課題を感じた。学習意欲の向上に有効な手立てを構造的に解明するために、これらについての実証的な研究と開発を行う。